

参考資料

① シンポジウム参考資料

シンポジウム式次第

参考資料1 歴代宝案関連地図

参考資料2 福州城外の琉球館および閩江周辺図

参考資料3 琉球国王・中国皇帝（明清代）一覧表

参考資料4 琉球使節の進京関連年表（咸豊・同治期）

参考資料5 冊封使渡来年表

参考資料6 異国船（欧米艦船）の琉球来航略年表

参考資料7 歴代宝案関連年表

参考資料8 『歴代宝案』訳注本全15冊一覧

② シンポジウム関連新聞記事

歴代宝案研究の先駆者たち（上・下）

よみがえる歴代宝案（上・下）

「歴代宝案」訳注本刊行記念シンポジウム

① シンポジウム参考資料

琉球王国の外交文書—よみがえる『歴代宝案』 『歴代宝案』 訳注本全 15 冊刊行記念シンポジウム

14:00 開会のあいさつ 半嶺 満 (沖縄県教育委員会教育長)

第1部 基調講演 14:15～14:40

濱下 武志 ([公財] 東洋文庫研究部長・東京大学名誉教授)

「歴代宝案から考えるグローバル・ヒストリー —東アジア海域論の再構成—」

(休憩)

第2部 パネルディスカッション 15:15～16:45

コーディネーター

渡辺美季 (東京大学大学院准教授、沖縄県歴代宝案編集委員会委員)

パネリスト

赤嶺 守 (名桜大学教授)

(沖縄県歴代宝案編集委員会委員、訳注本第6冊担当)

金城正篤 (琉球大学名誉教授)

(沖縄県歴代宝案編集委員会委員長、訳注本第9・10冊担当)

田名真之 (沖縄県立博物館・美術館館長)

(沖縄県歴代宝案編集委員会委員、訳注本第4冊担当)

西里喜行 (琉球大学名誉教授)

(沖縄県歴代宝案編集委員会委員、訳注本第13・14・15冊担当)

濱下武志 ([公財] 東洋文庫研究部長・東京大学名誉教授)

(沖縄県歴代宝案編集委員会副委員長、訳注本第7・8冊担当)

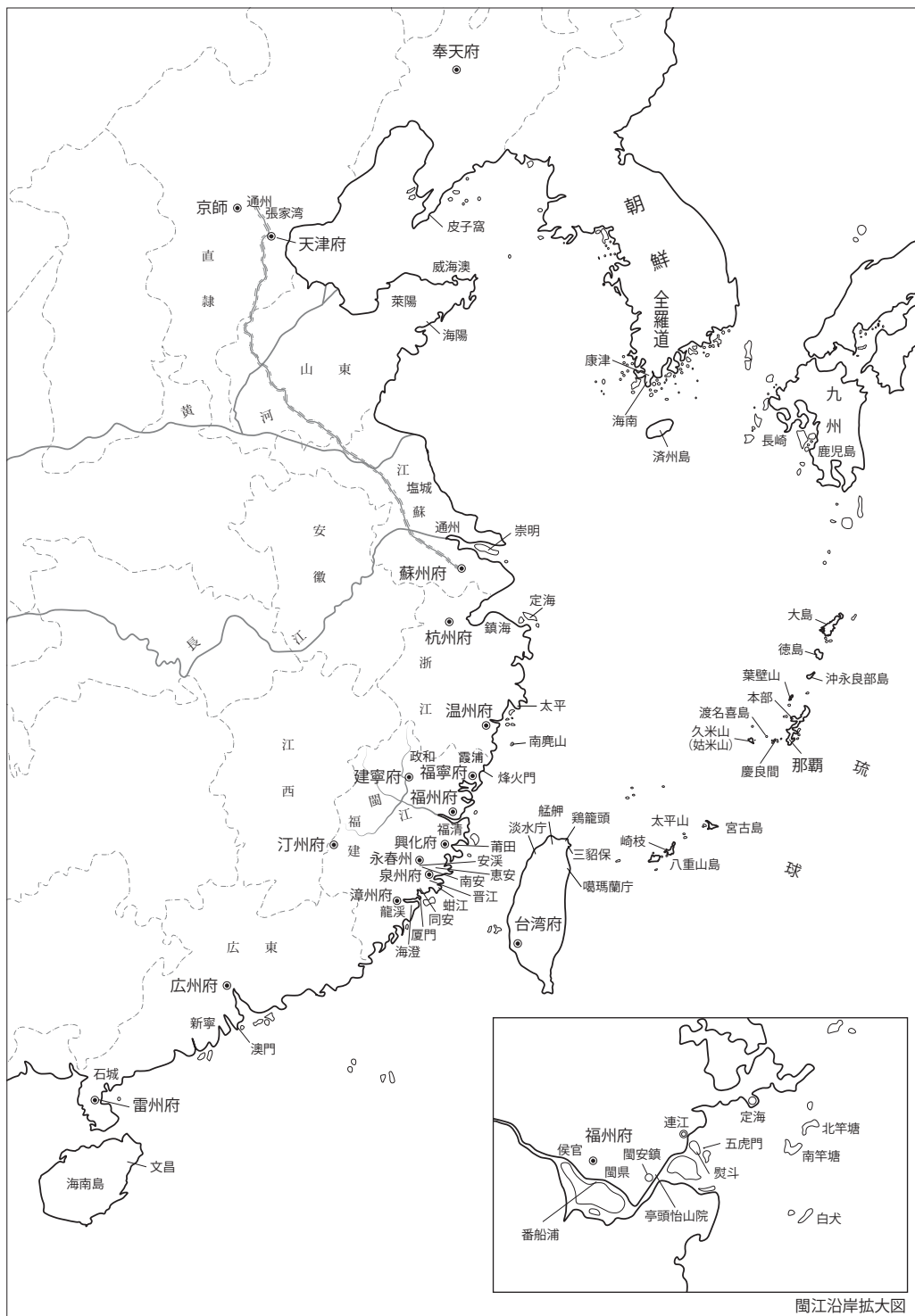
17:00 閉会

日時：2022年12月3日(土) 14:00～17:00

場所：沖縄県立博物館・美術館 3階講堂

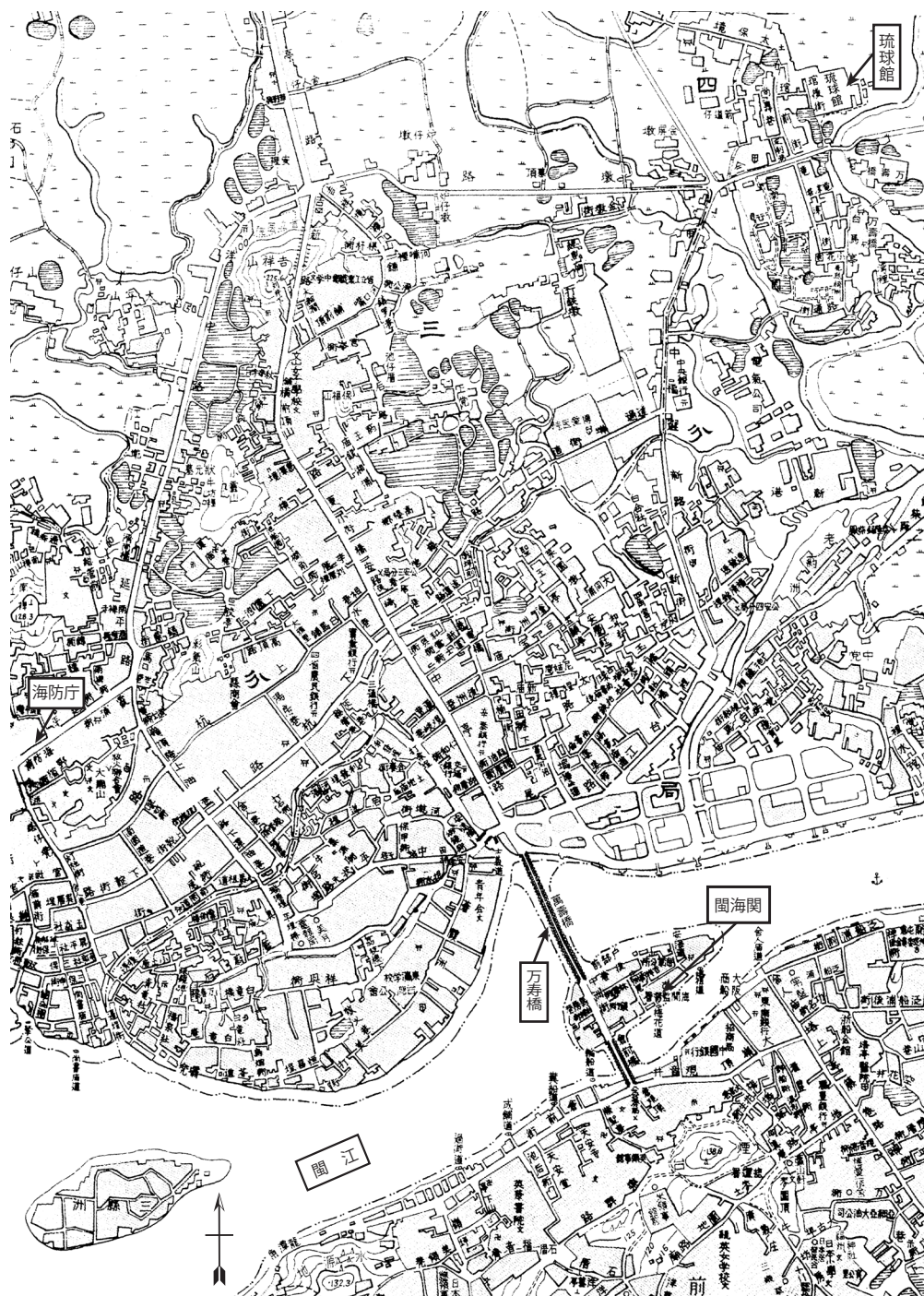
主催：沖縄県教育委員会

歴代宝案関連地図



訳注本第 15 冊関連地図（譚其驥主編『中国歴史地図集 第八冊 清時期』を参考に作成）

福州城外の琉球館および閩江周辺図



野上英一著『福州攷』付録「福州市街図」（1937年）〔琉中関係研究会編『中国福建省における琉球関係史跡調査報告書』（2009年）を参考に改変〕

琉球国王・中国皇帝（明清代）一覽表

琉球国中山王（第一尚氏王統）

代	王名	在位年代
1	思紹	永樂4(1406)－永樂19(1421)
2	尚巴志	永樂20(1422)－正統4(1439)
3	尚忠	正統5(1440)－正統9(1444)
4	尚思達	正統10(1445)－正統14(1449)
5	尚金福	景泰元(1450)－景泰4(1453)
6	尚泰久	景泰5(1454)－天順4(1460)
7	尚德	天順5(1461)－成化5(1469)

琉球国中山王（第二尚氏王統）

代	王名	在位年代
1	尚円	成化6(1470)－成化12(1476)
2	尚宣威	成化13(1477)
3	尚真	成化13(1477)－嘉靖5(1526)
4	尚清	嘉靖6(1527)－嘉靖34(1555)
5	尚元	嘉靖35(1556)－隆慶6(1572)
6	尚永	万曆元(1573)－万曆16(1588)
7	尚寧	万曆17(1589)－泰昌元(1620)
8	尚豊	天啓元(1621)－崇禎13(1640)
9	尚賢	崇禎14(1641)－順治4(1647)
10	尚質	順治5(1648)－康熙7(1668)
11	尚貞	康熙8(1669)－康熙48(1709)
12	尚益	康熙49(1710)－康熙51(1712)
13	尚敬	康熙52(1713)－乾隆16(1751)
14	尚穆	乾隆17(1752)－乾隆59(1794)
15	尚温	乾隆60(1795)－嘉慶7(1802)
16	尚成	嘉慶8(1803)
17	尚灝	嘉慶9(1804)－道光14(1834)
18	尚育	道光15(1835)－道光27(1847)
19	尚泰	道光28(1848)－同治11(1872)

中国皇帝（明代）

代	廟号 通称	在位年代
1	太祖 洪武帝	洪武元(1368)－洪武31(1398)
2	惠宗 建文帝	建文元(1399)－建文4(1402)
3	成祖 永樂帝	永樂元(1403)－永樂22(1424)
4	仁宗 洪熙帝	洪熙元(1425)
5	宣宗 宣德帝	宣德元(1426)－宣德10(1435)
6	英宗 正統帝	正統元(1436)－正統14(1449)
7	代宗 景泰帝	景泰元(1450)－景泰7(1456)
8	英宗 天順帝	天順元(1457)－天順8(1464)
9	憲宗 成化帝	成化元(1465)－成化23(1487)
10	孝宗 弘治帝	弘治元(1488)－弘治18(1505)
11	武宗 正德帝	正德元(1506)－正德16(1521)
12	世宗 嘉靖帝	嘉靖元(1522)－嘉靖45(1566)
13	穆宗 隆慶帝	隆慶元(1567)－隆慶6(1572)
14	神宗 万曆帝	万曆元(1573)－万曆47(1619)
15	光宗 泰昌帝	泰昌元(1620)
16	熹宗 天啓帝	天啓元(1621)－天啓7(1627)
17	毅宗 崇禎帝	崇禎元(1628)－崇禎17(1644)

中国皇帝（清代）

代	廟号 通称	在位年代
1	太祖(努爾哈赤)	天命元(1616)－天命11(1626)
2	太宗(皇太極)	天命11(1626)－崇德8(1643)
3	世祖 順治帝	崇德8(1643)－順治18(1661)
4	聖祖 康熙帝	順治18(1661)－康熙61(1722)
5	世宗 雍正帝	康熙61(1722)－雍正13(1735)
6	高宗 乾隆帝	雍正13(1735)－乾隆60(1795)
7	仁宗 嘉慶帝	嘉慶元(1796)－嘉慶25(1820)
8	宣宗 道光帝	嘉慶25(1820)－道光30(1850)
9	文宗 咸豐帝	道光30(1850)－咸豐11(1861)
10	穆宗 同治帝	咸豐11(1861)－同治13(1874)
11	德宗 光緒帝	同治13(1874)－光緒34(1908)
12	宣統帝	光緒34(1908)－宣統3(1911)

琉球使節の進京関連年表（咸豊・同治期）

年度	使節名 正副使	那覇発 →福州行	福州着	福州発 →北京行	北京着	北京発 →福州行	福州着	福州発 →那覇行	那覇着	備考
咸2(進) 1852	毛種美 蔡士俊	咸2.9.30	咸2.10.22 咸2.10.23	2.11.6	咸3.1.18	咸3.2.10	咸4.5	咸4.5.末	咸4.6.3	請諭使の馬克 承ら同行
咸4(進) 1854	向邦棟 毛克進	咸4.10.6	咸4.10.17	5.8.7	咸5.11.23	咸6.1.10	咸6.4.5	咸6.5.21	咸6.9.27	謝恩使兼任 帰途薩摩漂着
咸6(進) 1856	向有恒 阮宣詔	咸6.10.19	咸6.10.27	6.12.1	咸7.3.18	咸7.5.21	咸7.7.19	咸8.5.4	咸8.5.16	
咸8(進) 1858	翁俊 阮孝銓	咸8.10.8	咸8.10.16	9.3.6	咸9.6.4	咸9.7.22	咸9.10.18	咸10.4.29	咸10.5.16	
咸10(進) 1860	向志道 鄭德潤	咸10.11.17	咸11.3.10 咸11.2.4	—	—	—	—	同1.6.21	同1.9.8	進京不可 帰途漂着
同1(進) 1862	鄭 向啓元 林長隆		同1.11.4	—	—	—	—		同3.5.16	賊船遭遇 進京不可
同2(慶) 1863	馬文英 毛克述	同2.10.18	同3.2.17	3.8.25	同3.11.30	同4.2.1	同4.5.17			登極慶賀
同3(進) 1864	東国興 毛發榮	同3.10.13	同3.10.19	4.10.1	同4.12.18	同5.2.6	同5.4.11	同5.5.14 同5.6.4	同5.5.25	請封使兼任
同4(迎) 1865	發 鄭秉衡 鄭	同4.10.7	同4.10.21	—	—	—	—	同5.6.9	同5.6.21	接封使
同5(進) 1866	毛文彩 魏掌治		同5.10.25		同6.5.19	同6.7.2		同7.閏4.20	同7.5.5	謝恩使(御書)
同5(謝) 1866	馬朝棟 阮宣詔	同5.11.4	同5.11.10	6.4.7	同6.8.15	同6.10.17		同7.閏4.16	同7.5.5	謝恩使(冊封)
同7(進) 1868	向文光 林世爵	同7.10.2	同8.3.21	8.4.18	同8.8.20	同8.10.22	同9.1.18	同9.5.8	同9.5.19	往路遭風
同9(進) 1870	楊光裕 蔡呈植		同9.10.22	9.10.28	同10.2.2	同10.4.2		同11.5.23	同11.6.6	
同11(進) 1872	向德裕 王兼才	同11.10.16	同11.10.29	11.11.27	同12.3.6	同12.5.18		同13.4.20		
同13(進) 1874	毛精長 蔡呈祚	同13.9.13	同13.9.28	13.11.3	光1.2.9	光1.5.10				

典拠：『清代中琉関係檔案選編』、『清代中琉関係檔案統編』、『清代中琉関係檔案三編』、『歴代宝案』（台湾大学本）第十四冊・第十五冊、『中山世譜』卷十三、『球陽』卷二二、『琉球王国評定所文書』第八卷、『那覇市史』資料篇第1巻6（久米系家譜）、『那覇市史』資料篇第1巻7（首里系家譜）、『那覇市史』資料篇第1巻9（近世那覇関係資料）、『対外関係史総年表』（吉川弘文館）、東恩納寛惇『尚泰侯実録』、徐恭生「清代の琉球朝京使節の研究」（『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』所収）、頼正維「清代福建委派官員護送琉球臣赴京考」（『第五届中琉歴史関係学術会議論文集』所収）、深澤秋人「琉球使節の北京滞在期間—清朝との通交期を中心に—」（『沖繩国際大学 総合学術研究紀要』第8巻1号、2004）、『沖繩県史』12巻等参照。

冊封使渡来年表

国王名	封使名(官職)	出身地	渡来年	即位後	滞在期間	備考(使録等)
察度(中山)						初めて明に入貢(洪武5年12月=1373年) 察度即位から23年(中山王)と称す。
承察度(山南)						洪武13年10月(1380)明に入貢(山南王)と称す。
帕尼芝(山北)						洪武16年12月(1384)明に入貢(山北王)と称す。
攀安知(山北)						※『明実録』の洪武29年正月(1396)の段階で始めて(山北王)の名義で入貢している。それ以前に明廷の冊封を受けたと見られる。『中山世譜』(武寧王紀)に「本年(洪武29年)。…山北王珉薨。其子攀安知立。受封于朝。遣使入貢。」とある。
武寧(中山)	時中(行人)		永楽2年(1404)	8年		※『中山世譜』(武寧王紀)永楽2年の条「附」に「察度王始通中朝。自爾而後。天使數次來臨。至于武寧始受冊封之大典。著為例」とある。
汪忠祖(山南)						※『明実録』永楽2年(1404)4月壬午の条に「詔封汪忠祖。為琉球国山南王。忠祖故琉球山南王承察度從弟。…來朝貢方物。且奏乞如山北王例。賜冠帶衣服。…遂遣使賫詔封之。并賜之冠帶等物。而借其使俱還。」とある。『中山世譜』にも「本年(永楽2年)四月。山南王承察度從弟汪忠祖。亦受封于朝」とある。
思紹(中山)						※『明実録』永楽5年(1407)4月乙未の条に「琉球国中山王世子思紹。…別遣使。來告其父中山王武寧卒。命礼部。遣使賜祭賻。并遣使齋詔。封思紹嗣琉球国中山王。」とあって、冊封使が派遣されたと読める。『中山世譜』(思紹紀)には「此時成祖。不遣使。止賜詔封之」とあって、遣使はなかったとしている。
他魯每(山南)	陳秀芳(行人)*		永楽13年5月(1415)			*『明実録』永楽13年(1415)5月己酉の条に「賜詰命・冠服・鈔万五千錠」とある。『明史』琉球伝では陳季若とある。
尚巴志			洪熙元年(1425)	3年		
尚忠	余朴(正使・給事中) 劉遜(副使・行人)		正統8年(1443)	3年		
尚思達	陳傳(正使・給事中) 萬祥(副使・行人)		正統13年(1448)	3年		

尚金福	喬毅(正使・給事中) * 董守宏(副使・行人) *		景泰3年(1452)	2年		*『明実録』による。『中山世譜』に「陳謨一作喬毅未知孰是」とあり、『殊域周咨録』では陳謨とある。 *『明実録』による。『中山世譜』には董守宏とある。
尚泰久	李秉彝(正使・給事中) * 劉儉(副使・行人)		景泰7年(1456)	2年		*『歴代宝案』1-1-1による。『明実録』景泰6年(1455)4月辛卯の条には「遣給事中嚴誠為正使」とある。
尚徳	潘榮(正使・吏科給事中) 蔡哲(副使・行人司行人)	福建竜溪県 —	天順7年(1463)	2年	7月13日～	『歴代宝案』1-12-18
尚円	官榮(正使・給事中) * 韓文(副使・行人)	— 山西洪洞県	成化8年(1472)	2年	7月4日～	『歴代宝案』1-12-20による。 *『明実録』成化7年6月甲寅の条には「遣兵科給事中官榮」とある。
尚真	董旻(正使・兵科給事中) 張祥(副使・行人司右司副)		成化15年(1479)	2年	8月2日～	『歴代宝案』1-17-20
尚清	陳侃(正使・吏科左給事中) 高澄(副使・行人司行人)	浙江鄞県 直隸順天府固安県	嘉靖13年(1534)	7年	5月25日～9月20日 (114日) * *登舟は9月12日。	陳侃・高澄『使琉球録』、高澄『操舟記』による。
尚元	郭汝霖(正使・吏科左給事中) * 李際春(副使・行人司行人)	江西永豊県 河南杞県	嘉靖40年(1561)	6年	閏5月9日～10月18日 (157日) * *登舟は10月9日。	郭汝霖『使琉球録』による。 *『明実録』嘉靖37年(1558)4月戊寅の条には「遣刑科右給事中郭汝霖」とある。
尚永	蕭崇業(正使・戸科左給事中) 謝杰(副使・行人司行人)	雲南建水県 福建長楽県	万曆7年(1579)	6年	6月5日～10月24日 (138日) * *登舟は10月22日	蕭崇業『使琉球録』、謝杰『使琉球録撮要補遺』、同『日東交市記』(徐葆光録に引用)による。
尚寧	夏子陽(正使・兵科右給事中) 王士禎(副使・行人司行人)	江西玉山県 山東泗水県	万曆34年(1606)	17年	6月1日～10月20日 (138日) * *登舟は10月15日。	夏子陽『使琉球録』、王士禎『琉球入太学始末』による。

尚 豊	杜三策 (正使・戸科右給事中) * 楊 掄 (副使・行人司司正)	山東東平州 雲南鶴慶	崇禎 6 年 (1633)	12 年	6 月 9 日～11 月 9 日 (149 日) * * 滞在期間は胡靖『杜 天使冊封琉球真記奇 観』による。登舟は 11 月 8 日。	『歴代宝案』1-02-13 による。 * 杜三策は徐葆光『中山伝信録』に は「戸科左給事中」とある。
尚 質	張學禮 (正使・兵科副理官) 王 垓 (副使・行人司行人)	遼陽 山東膠州	康熙 2 年 (1663)	15 年	6 月 25 日～11 月 14 日 (138 日) *	張學禮『使琉球記』『中山紀略』に よる。 * 『宝案』(1-9-7) では来到 6 月 27 日とある。
尚 貞	汪 楫 (正使・翰林院檢討) 林麟焜 (副使・内閣中書舍人)	江蘇江都県 (原安徽) 福建莆田県	康熙 22 年 (1683)	14 年	6 月 26 日～11 月 24 日 (205 日)	汪楫『使琉球雜録』『中山沿革志』 による。
尚 敬	海 寶 (正使・翰林院檢討) 徐葆光 (副使・翰林院編修)	満洲八旗 (鎮白) 江蘇蘇州府長洲県	康熙 58 年 (1719)	6 年	6 月 1 日～翌年 2 月 16 日 (252 日)	徐葆光『中山伝信録』による。 (総勢 649 人：『那覇市史 家譜 (二)』程順則の譜による。)
尚 穆	全 魁 (正使・翰林院侍講) 周 煌 (副使・翰林院編修)	満洲八旗 (鎮白) 四川涪州	乾隆 21 年 (1756)	4 年	7 月 8 日～翌年 1 月 30 日 (229 日) *	周煌『琉球国志略』による。 * 6 月 14 日に久米島着。暴風のた め冊封使の乗った船が壊れるなど久 米島で足止めを食い、那覇着は 7 月 8 日。帰国は 11 月 7 日にいったん 那覇を出港するが風に遭い港へ戻 り、翌年 1 月 30 日に出港。
尚 温	趙文楷 (正使・翰林院修撰) 李鼎元 (副使・内閣中書)	安徽安慶府太湖県 四川綿州羅江县	嘉慶 5 年 (1800)	5 年	5 月 12 日～10 月 20 日 (157 日)	趙文楷『槎上存稿』、李鼎元『使琉 球記』による。
尚 灝	齊 鯤 (正使・翰林院編修) 費錫章 (副使・工科給事中)	福建侯官県 浙江歸安県	嘉慶 13 年 (1808)	4 年	閏 5 月 17 日～10 月 5 日 (136 日) * * 登舟は 10 月 2 日	齊鯤・費錫章『統琉球国志略』による。
尚 育	林鴻年 (正使・翰林院修撰) 高人鑑 (副使・翰林院編修)	福建侯官県 浙江錢塘県	道光 18 年 (1838)	3 年	5 月 9 日～10 月 12 日 (152 日)	

尚 泰	趙 新 (正使・詹事府右春坊右贊善) * 于光甲 (副使・内閣中書舍人) *	福建侯官県 直隸天津府滄州	同治 5 年 (1866)	18 年	6 月 22 日～11 月 10 日 (137 日)	趙新『統琉球国志略』による。 (総勢 455 人：『清代中琉関係档案統編』による。) * 『球陽』には趙新・翰林院檢討、于光甲翰林院編修とある。『宝案』3-12-02 には趙新・詹事府右贊善。于光甲は『統琉球国志略』と同じ。
-----	---	------------------	---------------	------	----------------------------	--

※本年表は、金城正篤氏作成の「冊封使渡来年表(稿)」(本シンポジウム当日配布参考資料)を原案として史料編集班が各冊封使録、「歴代宝案」、「明実録」の琉球史料(1)～(3)、真境名安興「沖繩一千年史」、夫馬進「増訂使琉球録解題及び研究」などを参照し改めたものである。

異国船（欧米艦船）の琉球来航略年表

1832年8月	アマースト号（船長リンゼイ、通訳官ギュツラフ）来航、一週間滞在、戦略的価値／貿易の可能性等調査
1840年8月	インディアン・オーク号（ボーマン船長、乗組員67名）、アヘン戦争参戦の途中台風に遭遇して漂流、沖縄本島北谷沖で座礁／沈没、乗組員全員救助され、浙江省舟山の英軍基地へ送還
1842年4月～5月	アヘン戦争参加の英国船、琉球各地に寄港、牛／山羊／鶏／野菜などの生鮮食料を要求／掠奪
1843年～45年	サマラン号（英国戦艦、ベルチャー艦長）、アヘン戦争終了後、琉球列島の各地を調査／測量
1844年4月	アルクメーヌ号（仏国艦船、デュプラン艦長）来航、フランス人のカトリック宣教師フォルカード、上陸／長期滞在
1846年4月	スターリング号（英国商船、マックチェイン船長）来航、英国籍の宣教師兼医師ベッテルハイム（伯徳令）一家、上陸／長期滞在
1846年5月	サビーヌ号（仏国艦船、ゲラン船長）来航、フォルカードの後任として宣教師ルチュルデュ（伯多禄）上陸
1846年6月	クレオパートル号（仏国艦船、セシーユ提督）等二隻来航（那覇→運天）、開港／条約締結要求
1849年12月	パイロット号（英国艦船、ライオンズ提督）、パーマストーン書簡携帯／提出
1852年2月	スフィンクス号（英国船、シャドウエル船長）、パーマストーン書簡携帯／提出、首里城強行入城
1852年月4月	ロバート・バウン号（米国籍苦力貿易船、ブレイソン船長）、乗船の苦力反乱により奪取され台湾へ→途次、石垣島崎枝村沖で座礁→苦力380名上陸／長期滞在（船上の20名は船員により厦門へ連行／裁判→英米艦船の襲来／捕縛作戦）→琉球側の苦力護送計画→福建へ護送船派遣→途中、海賊の襲撃
1853年～54年7月	ペリー、サスケハナ号（米国の日本開国遠征艦隊旗艦）等四隻、日本遠征の前進拠点化、日米和親条約、琉米修好条約締結。
1854年2月	ロビーナ号（イギリス船）、ベッテルハイムの後任として宣教師モートン来琉
1855年月2月	リヨン号（仏国艦隊、ゲラン提督）、琉仏条約締結。フランス人のカトリック宣教師、ジラル（1858年10月まで琉球に滞在）・フレ（1862年10月まで）・メルメ（1856年10月まで）来琉。
1859年7月	オランダ使節ファン・カペレン、琉蘭条約締結

歴代宝案関連年表

西暦	主なできごと（琉球・中国・日本）	歴代宝案編集関係	歴代宝案収録範囲
1372	中山王察度が初めて明に入貢		
1419	中山王思紹、暹羅（シヤム）に遣船		
1429	三山統一		
1531	「おもろさうし」巻1の編集		
1609	島津の侵攻		
1644	明朝滅び清朝が建つ		
1650	羽地朝秀（向象賢）、「中山世鑑」を著す		
1661	南明政権倒れる		
1673	久米村に孔子廟を創建		
1689	首里王府に系図座を設置		
1697		蔡鐸らによる歴代宝案第一次編集	
1701	蔡鐸が「中山世譜」を著す		
1713	「琉球国由来記」を編集		
1725	蔡温が「中山世譜」を改訂、以後編集継続（～1876）		
1729		程順則らによる第二次編集、その後も編集継続	
1731	鄭秉哲ら「琉球国旧記」を編集		
1745	鄭秉哲ら「球陽」を編集、以後編集継続（～1876）		
1814		このころ鄭良弼本成立か	
1846	英宣教師ベッテルハイムの来流		
1853	米ペリー艦隊が那覇に来航		
1854	琉米修好条約		
1866	尚泰、最後の冊封を受ける		
1867	大政奉還	このころ最後の編集がなされたか	
1879	沖縄県設置	王府保管本、旧沖縄県庁より東京・内務省へ移管 →関東大震災で焼失か	
1923			
1931		天妃宮保管本、久米村の神村家から天尊廟へ移される	
1932		12月～翌1月初 東恩納寛惇が筆写（東恩納筆写本）	
1933		8月 鎌倉芳太郎による写真撮影（鎌倉本） 11月 県立図書館へ移管、副本作成（旧県立図書館本）	
1934		（または1935）東恩納寛惇による写真撮影（東恩納影印本）	
1935		旧台北帝国大学小葉田淳氏依頼で写本作成（台湾大学蔵写本）	
1941		東京大学史料編纂所依頼で写本作成（東京大学蔵写本）	
1945	沖縄戦	旧県立図書館本焼失	
1972	本土復帰	台湾大学蔵『歴代宝案』影印本出版	
1986		『那覇市史』資料篇（歴代宝案第一集抄）刊行	
1989		沖縄県教育委員会による歴代宝案編集事業開始	
1991		中国第一歴史档案馆と「覚書」締結（～現在、第6次「協議書」）	
1992		『歴代宝案』校訂本第1・2冊刊行、第1回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム開催	
1993		（～現在。沖縄・北京と交互に開催）	
1994			1994 訳注本第1冊刊行
2016		『歴代宝案』校訂本第15冊刊行 （全15冊完結）	
2021		琉球王国交流史デジタルアーカイブ公開	
2022			2022 訳注本第15冊刊行 （全15冊完結）

444 年間

1424 永楽帝崩御の勅諭
（宝案最初の記録）

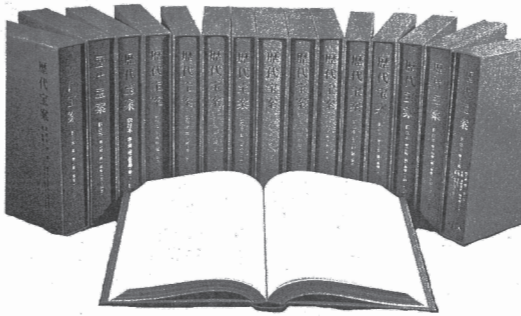
1867 の接貢関連記事
（宝案最後の記録）

『歴代宝案』 訳注本全 15 冊一覽

冊数	収録巻	収録年代 (西暦)	訳注者	訳注協力者	発行年月
第 1 冊	第 1 集巻 1 ~ 22	永楽 22 ~ 康熙 36 (1424 ~ 1697)	和田 久徳	池谷望子 内田晶子 高瀬恭子 土肥祐子 吹抜悠子	平成 6 年 3 月 (1994)
第 2 冊	第 1 集巻 23 ~ 43	宣徳 1 ~ 康熙 35 (1426 ~ 1696)	和田 久徳	池谷望子 内田晶子 高瀬恭子 土肥祐子 吹抜悠子	平成 9 年 3 月 (1997)
第 3 冊	二集 歴代宝案目録 (上下)	康熙 36 ~ 咸豊 8 (1697 ~ 1858)	神田 信夫	池谷望子 高瀬恭子 土肥祐子 宮田道昭 渡辺修	平成 10 年 3 月 (1998)
	第 2 集巻 1 ~ 14	康熙 36 ~ 雍正 3 (1697 ~ 1725)			
第 4 冊	第 2 集巻 15 ~ 30	雍正 3 ~ 乾隆 14 (1725 ~ 1749)	田名 真之		平成 29 年 3 月 (2017)
第 5 冊	第 2 集巻 31 ~ 49	乾隆 15 ~ 乾隆 30 (1750 ~ 1765)	生田 滋		平成 25 年 3 月 (2013)
第 6 冊	第 2 集巻 50 ~ 74	乾隆 31 ~ 乾隆 54 (1766 ~ 1789)	赤嶺 守	西里喜行	平成 31 年 3 月 (2019)
第 7 冊	第 2 集巻 75 ~ 89	乾隆 53 ~ 嘉慶 4 (1788 ~ 1799)	濱下 武志	黨武彦 林正子	平成 21 年 3 月 (2009)
第 8 冊	第 2 集巻 90 ~ 104	嘉慶 4 ~ 嘉慶 13 (1799 ~ 1808)	濱下 武志	黨武彦	令和 3 年 3 月 (2021)
第 9 冊	第 2 集巻 105 ~ 122	嘉慶 13 ~ 嘉慶 22 (1808 ~ 1817)	金城 正篤	富田千夏	平成 28 年 3 月 (2016)
第 10 冊	第 2 集巻 123 ~ 145	嘉慶 21 ~ 道光 7 (1816 ~ 1827)	金城 正篤	富田千夏	令和 2 年 3 月 (2020)
第 11 冊	第 2 集巻 146 ~ 160	道光 6 ~ 道光 15 (1826 ~ 1835)	小島 晋治	栗原純 白川知多 杉山文彦 並木頼寿	平成 17 年 3 月 (2005)
第 12 冊	第 2 集巻 161 ~ 173	道光 15 ~ 道光 21 (1835 ~ 1841)	小島 晋治	白川知多 杉山文彦	平成 27 年 3 月 (2015)
第 13 冊	第 2 集巻 174 ~ 189	道光 21 ~ 道光 30 (1841 ~ 1850)	西里 喜行	赤嶺守 上里賢一 豊見山和行	平成 14 年 3 月 (2002)
第 14 冊	第 2 集巻 190 ~ 200	道光 30 ~ 咸豊 8 (1850 ~ 1858)	西里 喜行	赤嶺守 上里賢一 豊見山和行	平成 30 年 3 月 (2018)
第 15 冊	第 3 集巻 1 ~ 13	咸豊 9 ~ 同治 6 (1859 ~ 1867)	西里 喜行	漢那敬子 本村育恵	令和 4 年 3 月 (2022)
	別集 嘸嘆情状 (別台)	道光 24 ~ 道光 27 (1844 ~ 1847)			
	別集 嘸嘆啞三国情状 (別鎌)	道光 26 ~ 咸豊 5 (1846 ~ 1855)			
	咨集 文組方	乾隆 38 ~ 49 (1773 ~ 1784)			
	康熙五十八年亥 冠船の時唐人持ち来たり候貨物録	康熙 58 (1719)			
	二集 歴代宝案目録 (乾)	康熙 36 ~ 乾隆 40 (1697 ~ 1775)			
	二集 歴代宝案目録 (坤)	乾隆 40 ~ 嘉慶 25 (1775 ~ 1820)			

②シンポジウム関連新聞記事

全15冊の刊行が完了した「歴代宝案」訳注本（県教育委員会提供）



歴代宝案研究の先駆者たち

訳注本全15冊刊行に寄せて

高良 倉吉

琉球王国の外交を支えたり、それが沖縄県立図書館人材の拠点、久松村の明倫に移されたことは、琉球と交流し琉球の、その歴史実態に向き合うことが可能となったからである。少



昭和8年のことである。

中国、明朝、清朝を始、東南アジア諸国と琉球の交流状況を概論して、琉球史の新たな地帯を拓いた。東恩納とともに、『宝案』の重要性注目したの、小森田淳（1905〜23）78年、広島県豊田に

たからくらし、1947年伊勢丹生まれ、愛知教育大卒。沖縄史料編集所専門員、浦添市立図書館長などを経て琉球大法政学専攻教授、現在同大名誉教授。文学博士。主著書に『琉球の詩』、『大名家のなごの琉球王国』、『琉球王国の構造』などがある。

琉球史に新たな地平

東南アジア史にも貴重

下、『宝案』と略抄の研究に取り組み研究者が登場した。

パイオニア

東京に居、琉球史研究のパイオニアとして活動していた沖縄出身の東恩納寛博（1882〜1963年）を挙げたい。彼は『黎明期の海外交通史』（1941年）を発表し、中国や朝鮮

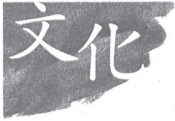
も触れておきたい。『日支交渉史研究』（1939年）『東亜交渉史論』（1944年）などの著作も通い、その成果を『中世南島通交貿易史の研究』（1963年）として発表し、東アジアおよび東南アジアにまたがる琉球の交流状況を展望した。『黎明期の海外交通史』と『中世南島通交貿易史』

41年」という書き下ろしの著作を、僅か28歳の若さで刊行した。『宝案』研究の成果を言みながらも、沖縄という地域の「海洋発展の全体像を、彼が生きた時代にまで拡大して描いた通論であった。

英訳して出版

戦後、小森田はハワイの東西文化センターに招かれ、その機会にハワイ大学の松田賢と協同し画期的な仕事を果たしている。『宝案』関係のすべての文書を抽出し、それを英訳して出版したのである（1969年刊行）。この本は、難解な漢文で記述されている『宝案』の内容を、英語を理解する人々のために提供したものであった。

沖縄県による『歴代宝案』刊行事業の完結に際して、海外通交史研究に合った『早稲の先学たち』の関係を思い出される。



よみがえる 歴代宝案

1 訳注本全15冊刊行に寄せて

上里賢一

①

『歴代宝案』は、沖縄の世界に誇る文化遺産である『歴代宝案』には、1424年から1867年までの444年間の琉球の外交文書の写が収められている。これは中国の明・清時代に当たり、当時のアジアは、中国を宗主国とする朝貢体制という国際秩序下にあった。中国に朝貢していた周辺国の中でも、これほどの量と時間を力バース文書が残っているのはまれである。その意味で、これは沖縄の文化遺産としてだけではなく、朝鮮、ベトナム、タイ、マレーシアなど東・東南アジア諸国にとっても貴重な記録といえる。

残念なことにその原本は、関東大震災や先の戦災などで失われた。この貴重な記録を再現し後世に残そうという企画が沖縄県で立ち上がり、1989年に歴代宝案編集事業が発足した。失われたものをどのようにして再現するか。

444年の貴重な記録再現

県民の知的財産 作業続く

れた部分的な抄本や青焼きなど、あらゆる関連資料が集められた。北京の中国第一歴史档案馆、台湾の故宫博物院、中央研究院、台湾大学などの



歴代宝案の訳注本全15冊 (県教育委員会提供)

『歴代宝案』は、沖縄の世界に誇る文化遺産である『歴代宝案』には、1424年から1867年までの444年間の琉球の外交文書の写が収められている。これは中国の明・清時代に当たり、当時のアジアは、中国を宗主国とする朝貢体制という国際秩序下にあった。中国に朝貢していた周辺国の中でも、これほどの量と時間を力バース文書が残っているのはまれである。その意味で、これは沖縄の文化遺産としてだけではなく、朝鮮、ベトナム、タイ、マレーシアなど東・東南アジア諸国にとっても貴重な記録といえる。

資料は、原本の再現と破損や虫食いなどで判断が困難な部分の解明に大きな役割を果たした。そして、82年の校訂本第1冊、第2冊を切り、2016年12月までに全15冊が刊行され、『歴代宝案』の本文は復元された。しかし、この難解な漢文資料である本を復元しただけでは、その内容を理解しただけはいえない。そこで、本文読み下し注釈を付した訳注本の編集が進められ、22年3月までに全15冊が完成し、県民の知的財産として、面目を新たにしようがえった。校訂・訳注に当たっ

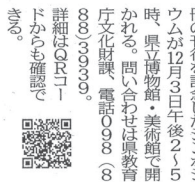
た編集委員の中には、小森田渡和久氏、神田信夫、小島豊治氏ら、すでに鬼籍に入った方もおり、30年を越える編集作業の歴史を思わせる。そして、82年の校訂本第1冊、第2冊を切り、2016年12月までに全15冊が刊行され、『歴代宝案』の本文は復元された。しかし、この難解な漢文資料である本を復元しただけでは、その内容を理解しただけはいえない。そこで、本文読み下し注釈を付した訳注本の編集が進められ、22年3月までに全15冊が完成し、県民の知的財産として、面目を新たにしようがえった。校訂・訳注に当たっ

ている。その勢いは今後さらに大きくなっていくに違いない。しかし、編集作業はまだまだ終わりでない。編纂作業は、これから新たな段階に進む。『歴代宝案』の解説本(普及本)、デジタル化、辞典、現代語訳、英語訳など、大きな仕事が残っている。その実現のために、県教委では17年に第3次刊行計画を策定し、早速『歴代宝案』の解説本(普及本)の編集とデジタル化に向けた作業取りかかっている。『歴代宝案』を研究者だけでなく、県民に活用できるように、親しんでもらおうというわけだ。

デジタル化の作業は、資料の発掘と保存、保護と利用普及といった課題と併せて、避けて通れない喫緊の課題といえる。その取り組みは、『琉球王国交際史』、『琉球王国交際史資料デジタルアーカイブ』のサイトを公開し、『歴代宝案』校訂本・訳注本をはじめ、『首里王府仕置』、『琉球王国評定所文書』、『戦前の琉球新報』、『沖縄毎日新聞』などの記事見出しを「いつでも、だれでも」どこからでも「閲覧できるように公開している。(校訂本のテキスト、新聞紙面は順次公開予定)。

委員は、この二つのシボ、学会のメンバーでもある。今回のシボプログラムでは、濱下武志委員の「基調講演」『歴代宝案から考えるグローバル・ヒストリー—東アジア海域論の再構成』、および5人の訳注担当者による討議が予定されている。歴代宝案編集の目的や意味、編集を進めるエピソード、今後の課題など、多方面から権に討議されるものと期待されている。(琉球大学名誉教授、歴代宝案編集委員会委員長)

来月3日シボ
『歴代宝案』の訳注本全15冊の刊行を記念したシボプログラムが12月3日午後2時から、県立博物館・美術館で開かれる。問い合わせは県教育庁文化財課、電話098(8)8030000。



よみがえる 歴代宝案

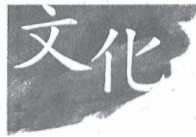
— 訳注本全15冊刊行に寄せて —

麻生伸一

1424年から1867年
にわたる首里王府の外交書
を編むこと「歴代宝案」は
琉球の政治外交社会を知る
うえで基礎的な資料である。

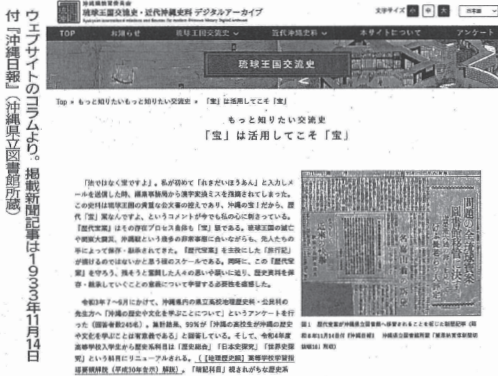
しかし、かつて存在した
「歴代宝案」の1部明治政
府の接収を受け、その後焼失
し、もう一部も沖繩戦によ
って失われてしまふ。沖繩県、
その「歴代宝案」を奪本や影
印本とを校合して校訂本
を、さらに校訂本を複製し
注釈付した訳注本を刊行し
た。「歴代宝案」は誰もが手
に取れやすいう形でもがえ
たのである。これまで30年を
超える長期の編集事業をやり
通した原の仕事は高く評価す
べきであろうが、現状は基礎
事業が一区切りを迎えたと見
なすべきでない。編集事業が
一段落したことを踏まえ、研
究と普及という観点から「歴
代宝案」の今後について考え
てみたい。

まず、研究面で求められるの



る。テキストが校訂されたの
は研究上、大きな進展となっ
たが、今後より求められるの
は「歴代宝案」のテキストた

琉球社会解明の起点に 普及へウェブの活用重要



ウェブサイトの3コマより。掲載新聞記事は1993年11月14日付「琉球時報」(沖縄県立図書館所蔵)

けに縛られない歴史像を示す
てである。「歴代宝案」は実際に発給
の外交書は、日本や清朝と
構成されている。そのため外
交文書の裏面にある愛情や文
書作成までの事前交渉は記さ
れない場合もある。そもそも
掲載されている文書のほとんど
が「漢文」という制約があるだ
ろ。そこで、欧史料や日文
史料などとも「歴代宝案」を
つなぐ作業が求められる。
また、首里王府が「歴代宝案」
をどのように活用してい
たかを明らかにするも課題
である。王府にとって過去の
行政文書や公式文書記録保
管し、必要に応じて参照する
のは、日本や中国という「大
国」相手に展開する外交実践
そのものだったからである。

実際に「歴代宝案」に含まれ
る外交文書は、日本や清朝と
の交渉を展開する過程で琉球
側の妥協性・正當性を主張す
るために有効な材料となつた。
し、首里王府の政治権限の場
において「歴代宝案」所収の
文書が引用されることもあつ
た。つまり王府は、過去の事
績の記録としてだけではなく
、現実的な問題解決を目指す
ために「歴代宝案」を編ま
んていたのである。199
7年から始まる編纂事業
に携わった程順性(古波蔵
通事親筆)とは「歴代宝案」
を真に我が中山の宝なり
(原漢文「程氏家譜」と書
いたが、これは「歴代宝案」
が過去の事績を集めたという
だけでなく、政治実践の参考
資料としての性格を有してい
たためであると思われる。行

行政資料として「歴代宝案」が
どのように活用されてきたか
を追求することは、首里王府
の政治外交の解明につながる
だろう。なにより過去の記
録を知ると首里王府や王府役
士の態度や考えを知ること
は、過去を踏まえて現在の問
題を考え将来を展望するとい
う意味で、いまの沖繩にとっ
ても必要な視点であると思
われる。

普及活動で求められるのは
「編集事業で得られた知見
を市民共通的に知ることであ
る。共有することである。解
難な言葉や表現をなめる
「歴代宝案」の各文書を理解
するには時間を要する。その
ため講座などを通して「歴代
宝案」の概要を示しつつ、内
容を噛み砕きながら広く周知
することが求められる。12月
3日のシンポジウムや、県立
博物館・美術館博物館常設展
王国で開催中の「このかたの
王冠の記録」「歴代宝案」ゆ
きからヒト・モノ」(20
23年2月12日)などが
そうである。一方で複雑な内
容を深く理解する必要もあ
る。私たちの日常生活では
ほとんど使わない言葉や複雑
な文書構造をひもとくにつ
り上げて「歴代宝案」の持つ
重厚さや奥深さを認識するの
は、当時の首里王府の持つ知
識や教養を理解するうえで重
要であろう。

ところで研究・普及のツ
ールとして期待したが、沖
縄県教育委員会が運営する
「琉球王国交流史・近代沖繩
史料デジタルアーカイブ」で

ある。このウェブサイトには
「歴代宝案」の校訂本と訳注
本のテキストのほか、関連資
料のテキストデータが掲載さ
れ、キーワードを用いた検索
ができるシステムを備えてい
る。関連資料には、王府出
るの法令や行政文書、論文等
が含まれているため幅広い情
報収集が可能である。今後の
「歴代宝案」活用が琉球
史研究の基礎となるものと
思われる。もちろん教育普及の
場面でこのウェブサイトは、
既にこのウェブサイトには、
授業実践のための3コマ
も掲載されている。ウェブサ
イトの拡充と活用促進が求
まれる。

「歴代宝案」を統括しては
日本や中国などの関連地域と
つながる。

絶妙なバランス感覚で外交を
展開していた首里王府の政治
思想や外交実践を明らかに
し、かつての琉球社会を解き
明かす営みにも通じている。
「歴代宝案」を起すこと
で、琉球沖繩の過去を知り未来を
切り開くのはこれからであ
る。

琉球大学人文社会科学部教授
◇ 「歴代宝案」の訳注本全15
冊の刊行を記念しシンポジ
ウムが12月3日午後2時
時、県立博物館・美術館で開
かれる。問い合わせは県教育
庁文化財課 電話098(8
888)3939
◇ 詳細はQRコード
からも確認でき

「歴代宝案」訳注本刊行 記念シンポジウム



「歴代宝案」訳注本刊の意義や研究の課題などについて意見を交わす登壇者（左から）那覇市の県立博物館・美術館

琉球王国の外交文書をまとめた「歴代宝案」の読み下しを記した「訳注本」全15冊の刊行完了を記念したシンポジウム。琉球王国の外交文書「よみがえる「歴代宝案」」（県教育委員会

欧米史料との照合を

登壇者 重要性強調、課題示す

主催が、那覇市の県立博物館・美術館で開かれた。濱下武志氏（東洋文庫研究部長）が基調講演。パネリストとして、那覇市立大学（以下、那大）の西里晋行（琉球学

教授）が登壇。コテイネタ氏は渡辺美季氏（東京大学大学院准教授）が務めた。濱下さんは「歴代宝案で示される東アジアの朝貢貿易に関する記述に加え、北京だけでなく福州などを拠点とした「朝貢」という枠を

研究課題として、琉球がグローバルな胡椒、生糸、銀の流通ネットワークに参画していた「朝貢関係を活

るしい変化に対応し、王国末期にあった琉球側がどういう外交戦略、戦術をとったかが分かる文書が含まれている」と述べた。

西欧諸国から突きつられた開国の要求に対し、琉球側が交渉を引き延ばして史料と「語った。

赤嶺さんは「歴代宝案」校訂本、訳注本の刊行事業は中国や台湾側の協力を得た「国際的な合作だ」と強調。校訂本の復元過程について「古い文書は虫食いで見ることができないところがある。国内には残っていない史料がある。同時代の文書を確認すれば、虫食いの部分も知ることができると述べた。

さらに視野を広げて英人やフランス人を欧米に残留する文書を集集、解析する努力が求められる」と強調した。（宮城隆博）

西里さんは第13、15冊に利用した国際交易に着目する必要性を指摘、今後の

流民に関するもので埋め尽くされている」と指摘。冊封使を乗せた船が座礁した際、適切な対応を急いだ清

朝の担当者が流罪となったことが記された文書を挙げ、「琉球の使節を清朝側が重視していたことが分かる」と述べた。

田名さんは難しいとされる史書の読み下しに関連し「校訂本、訳注本に携わった先生方によって「読みが」統一されてい

ない点も将来の課題だ」と述べた。県教委が手掛ける前の那覇市史による事業から数えれば「歴代宝案」事業は世紀が経過することになるが、それでも完全版ではない。これからの研究資料続けなければならない

と述べた。

訂正

8日付17面
の「歴代宝案」訳注本刊行記念シンポジウムの記事で「冊封使を乗せた船」とあるのは「冊封使を迎えに行った使者」が乗った接見船の誤りでした。おわびして訂正します。

12月14日 訂正記事